

「平和と環境」をテーマに対話し、発表する参加者たち
 —長崎市平野町、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館



「平和と環境」テーマに集会

対話通じ課題探る

沖縄、カザフの事例報告も

長崎

「平和と環境」をテーマに参加者が対話を通じて未来への地球規模の課題を探る集会が25日、長崎市で開かれた。イオン環境財団と長崎大核兵器廃絶研究センター、同大グローバルリスク研究センターが主催し、関心を持つ学生や研究者ら約30人が参加。沖縄やカザフスタンなどでの取り組みの報告があり、それらを踏

まえて議論した。

琉球大の喜納育江学長は、沖縄戦の体験を語り継ぐ「ひめゆり平和祈念資料館」などを例に挙げ、世代をつないで戦争の記憶を分かち、有する重要性を指摘。「痛みや悲しみを自分のものとして共感できた時、記憶が伝わる」と訴えた。

母国カザフスタンで旧ソ連時代に繰り返された核実験と、その禁止を求めた市民運動の国際的な反響について紹介。「人間の間違いや失敗を繰り返さないよう、次の世代、その次の世代にも歴史を語り続けなければならぬ」と語った。

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の松尾真由美副館長は、被爆者の体験と平和の願いを伝える取り組みを紹介。内閣府国際平和協力本部研究員の梅津茜さんは、戦争によって引き起こされる環境汚染と、その修復の困難さを報告した。

参加者は5人ほどのグループに分かれて議論。「戦後80年の節目に立つ私たちが、次の世代に向けて担うべき責任や行動とは？」という問いに、「90年、100年に向けて、学んで伝えて広げていく」「意見が異なっても、相手を知り、人間として認め、対話によって関係をつくる」「人の心に響くアートとして伝える」といった意見が出された。(佐々木亮)